

吉井源太と明治

《3》

大蔵省あての履歴書

遺品の中には吉井源太直筆の「履歴書」がある。これは、明治三十年代後半、県庁を通して大蔵省印刷局に提出されたものの控えのようだ。

源太はその数年後に亡くなるので、これは晩年の筆になる。これは晩年の筆になる。

二十六行の縦の罫線が入った用紙に書かれていて、一枚ずつを半分折ってとじてある。用紙は十四枚、全体で二十八頁のものだ。

明治になるまでは、わずかしか書かれていないが、明治九（一八七六）年からは毎年のできごとが書かれている。項目によっては、

これまであまり知られていなかったことがかなり詳しく説明されていたり、その時の事情などが書かれているところもある。

大蔵省印刷局は、紙幣を製造するところで、中でも紙幣の用紙を作る役目を持った抄紙部と源太は深い交流があった。

この履歴書と日記を手がかりにして、まずその生涯の初期を振り返ってみよう。履歴書の記述は、出生のときから始まる。

源太は、文政九（一八二六）年三月十五日、土佐国吾川郡伊野町（この時は伊野村）に生まれる。三月一日生まれ、と書かれている履歴もあるが、このころは今ほど出生の通知も厳格ではなかったのだろう。

父は吉井多平。この父は、久松氏から、吉井龜の婿として吉井家へ入った人だ。成長した源太は、国乗世衛を妻とした。長男洋助は若くして亡くなった。ま

た、祖先より製紙を業とし、幕政の時代には御用紙漉といひ、代々藩主山内家の用紙を製造した——などといったことが、履歴の前半に書かれてある。

その次に記されているのが、多彩な芸に通じたことだ。

それによると、楠瀬棠、徳弘薫斎、春木南溟等に学んで、南宋派の絵画を学んでいる。雅号を得一棧、または五厘庵とした。

また、俳諧を学んで、芭蕉を師とする蕉門のグループに入り、そこでの俳号を

半仙とした。遺品には画帳があり、また日記のページの隅や、日記帳の最後の余ったページには色々な絵の下書きが描かれている。今でいうイラストのようなものも多く、絵画の腕前はかなりのものであったことがわかる。

また俳句についても、日記には何かにつけて詠まれた俳句がたくさん書き付けられている。

明治十（一八七七）年には東京で開かれた内国勸業博覧会に出かけた。この前年十月に父の多平が七十五歳で亡くなっている。

東京へ滞在したのは翌年八月初めから十月初めまでで、ちょうどお盆、しかも父の初盆に当たるときだった。

その時には次のような句を詠んでいる。東京の空の下、父の顔を思い浮かべた様子がよくわかる。

親に似た 人顔もなし
盆の月
叱られた 親の恋しき
盆の空

（京大大学院研修員、京都府在住）



約150年前に建てられた生家の、薬医門からの眺め
(いの町指定文化財)